

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

人の目なんか気にするな、自分を信じて、自分のやりたいようにやればいい、などと言う人がいる。たしかにそれは正論かもしれない。人の目ばかり気にしてもしようがない。それはわかるんだけど、①どうしても人の目を気にしてしまう。そんな人が多いはずだ。

それは当然だ。だれだって人の目は気になる。気にならないわけがない。周りの人の目に自分がどう映っているか。それは、だれにとっても大きな関心事だ。

とくに友だちからどう見られているかは最大の関心事と言ってよいだろう。

いつもこつちに気づくと笑顔で挨拶して^{えがお}くる友だちが無表情で通り過ぎると、「気づかなかったのかな」と思いつつも、「もしかして怒らせるようなことを何か言ったかなあ」と気になって^{おこ}②シカタがない。

軽い気持ちでからかうような冗談を言ったとき、友だちがちよつとムツとした様子を見せたりすると、「うっかり傷つけちゃったかな、まづいなあ」と気になってしようがない。

このように、③僕たちは、ニチジョウのあらゆる場面で、相手からどう思われているかを気にする。④シユウセイを身につけている。どうしてそんなに人の目が気になるのか。それは、人の目が自分の姿を映し出してくれる鏡だからだ。

だれでも自分を知りたい。⑤、自分を知るヒントは、人との比較によって得られる。

人の目は、言ってみれば、モニターカメラのようなもの。自分の姿が客観的にどのように見えるのか。それを教えてくれるのが人の目だ。

あの人からどう思われているんだろう。もっと仲良くなりたいんだけど、好意的に見てくれるかな。嫌われてたらショックだな。

グループの仲間たちからどう思われているんだろう。最近個人的にちよつといろいろあって、つきあいが悪くなっちゃったけ

ど、大丈夫かな。

部活の仲間は、信頼しんらいしてくれているだろうか。あまり⑥を割って話すこともないんだけど、この前の試合でミスをしてしまったし、足手まといだとか思われてないだろうか。

そんなふうには、だれでも⑦シユウシ人の目を気にしているものだ。人の目は気になって当然なのだ。

社会学者クローリーは、自己というのは社会的なかわりによって支えられており、それは他者の目に映ったものだから、「鏡映自己」と呼ぶことができるという。

自分の顔を直接自分で見ることはできない。鏡に映すことで初めて見ることができ。鏡がなければ、自分がどんな顔をしているのかを知ることができない。

それと同じで、他者の目という鏡に映し出されない限り、僕たちは自分の人柄ひとがらや能力といった内面的な特徴とくちょうを知ることができない。他者の反応によって、自分の人柄や能力がどのように評価されているかがわかり、自分の態度や発言が適切であったかどうかを知ることができる。

鏡映自己という言い方には、⑧そんな意味が込められている。僕たちの自己は、他者の目を鏡として映し出されたものだというわけだ。

自分を知るヒントとなる他者との比較の結果も、他者の目という鏡に映し出されていることが少くない。その意味では、僕たちの自己が他者の目に映し出されたものだというのは正しいと言ってよいだろう。

⑨クローリーは、他者の目に自分がどのように映っているかを知ることによって、誇りとか屈辱くつじやくのような感情が生じるという。これは、だれもがニチジョウ的に経験していることだ。

人から好意的に見られていることがわかれば、とても嬉しいし、自信にもなる。能力や人柄を高く評価してくれると知れば、誇らしい気持ちになる。反対に、否定的に見られていることがわかると、ガツカリして気持ちが落ち込み、自信がなくなる。

僕たちが、ともすると気の合う仲間同士、価値観や性格の合う者同士でまとまりがちなのも、周囲の人の目に映る自分の姿が肯定

的なほど嬉しいし、力が湧いてくるからだ。⑩自分の姿を輝かせてくれる鏡がほしい。それは、だれもが密かに望んでいることのはずだ。

ただし、嬉しいとか、落ち込むとか、感情的に反応するだけでなく、どこが評価されたんだろう、どんな点がダメなんだろうと⑪認知的に反応できる人は、たとえ否定的評価を受けていることがわかってても、今後の⑫カイゼンに活かすことができる。ここでの認知的反応とは、感情的に反応するのではなく、頭で反応すること、論理的に反応することを指す。

その意味では、自分を輝かせてくれる鏡としての他者だけでなく、ときにみずばらしい自分やイヤな自分を映し出してくれる辛口(からくち)の他者、価値観や性格の異なる他者とのつきあいも大切だ。そういう他者との出会いが、自分に対する気づき(あた)を与えてくれ、自分の成長のきっかけになることもある。

『自分らしさ』って何だろう？』榎本博明)

問一 — 部①「どうしても人の目を気にしてしまう」とありますが、それはなぜですか。解答らんに合うように、文中から二十字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 — 部②・③・④・⑦・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 — 部⑤・⑨に当てはまる言葉を次のア～オのうちからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア では イ さらに ウ あるいは エ そして オ なぜなら

問四 — 部⑥に「本心を打ち明ける」という意味になるように、当てはまる体の部位を漢字一字で書きなさい。

問五 — 部⑧「そんな意味」を説明した次の文の部()に当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

A (五字)

によってはじめて

B (二十三字)

ができるということ。

問六 ——部⑩「自分の姿を輝かせてくれる鏡」とはどういうことですか。解答らんに合うように、文中の言葉を使って二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

周囲の人が 目で見てくれること。

問七 ——部⑪「認知的に反応できる人」とありますが、その例として合わないものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 毎日欠かさず練習をしたことで、ピアノのコンクールで緊張きんちようせずにひくことができ、先生にほめられた。

イ クラスで仲がよかった友だちとけんかをしてしまったが、自分の言動が悪かったのだと反省した。

ウ どのチームよりも放課後の練習時間をたくさん取ったことで、体育祭で優勝することができた。

エ 苦手な教科の勉強をがんばったにもかかわらず、テストで思うような点数が取れずに悲しかった。

オ 昨日新しく買ってもらったゲームに夢中になって夜おそくまで起きていたので、朝起きられなかった。

問八 筆者は、自分を知るためにはどのような他者との出会いが必要だと言っていますか。二種類挙げて、六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「だれに聞いたの」

給食がおわったあと、わたしは①アキ教室で梢こずえに聞いたのだした。

梢の態度からは、給食のときの②ふてぶてしさが消えていた。大きな体を③チヂこまらせて、梢はぼそぼそとこたえた。

「・・・美貴みきのおばあちゃんに。美貴のおばあちゃん、うちのおばあちゃんと友だちで、たまに話に来るのよ。春休みに会ったときに、美貴のことを聞いて、いっしょのクラスになったら仲よくしてあげてくれて・・・」

信じられない。わたしは思わずそうつぶやいていた。親の会社がつぶれて私立の学校に通えなくなったなんてこと、同級生に知られたら、わたしがどんなにみじめな気分になるか、祖母は考えもしなかったのだろうか。

声がふるえてしまわないように、わたしは「そう」と無感情に言った。

「つまり、最初からわたしのことをあわれんで、親切にしてくれてたわけね」

「そんなつもりじゃ・・・」

言いかえそうとした梢の顔を、わたしはきつくにらんだ。そうしてないと、くやしくて涙なみだがこぼれそうだった。対等と思っていた相手から、ひそかにずっとあわれみを受けていた。そのことはわたしにとって、たえられないほどの屈辱くつじやくだった。

「それで、どうしていまさら④わたしの事情をばらしたりしたの。朝からわたしにおこったみたいだけど、わたし、なにか気にさわることもした？」

「それは、美貴があんなこと書くから・・・」

わたしは「あんなこと？」とまゆをひそめた。すると梢はせめるような瞳ひとみでわたしを見つめてこたえた。

「・・・公民館の、七夕飾かざりりの短冊たんさく。清凜せいりんに帰りたいって、あれ美貴が書いたんですよ」

ああ、とため息まじりの声もれた。勉強会が解散したあと、わたしはこっそり公民館にもどって、短冊に願いを書いていた。

意味がないことはわかっていても、書かずにはいらなかったのだ。だれにもわかりはしないだろう、と⑤たかをくくっていたのがまちがいだった。

まあ、もうどうだっていいけど。そんなふうには投げやりな気分では考えていたら、梢がうつむいて続けた。

「あの短冊を見つけたとき、すごく悲しかった。あたしはもうすっかり美貴と友だちのつもりだったのに、美貴はずっとどの学校に帰らなかったんだって。あたしたちのことなんて、なんとも思っただけでなかったんだって。それでいららして、あんな・・・」

そう話す梢は本気で傷ついているようで、わたしは動揺どうようしてしまった。顔を上げた梢の目には涙のつぶがうかんでいて、それを見わたしたしはとっさに、⑥。

「もういいわ、じゃあ」

わたしは足早に教室を出た。ろうかろうかで聞き耳を立てていた朋華ともかのことも無視した。

しばらくしても梢が追いかけてこないのほっとした。鼻の奥おくがさつきからずと熱かったけど、意地でも泣いてやるものかと決めた。

その日の部活は仮病けびょうを使って休んだ。梢と顔をあわせたくなかったから。

家に帰ると、玄関先げんかんさきで花の水やりをしていた祖母が声をかけてきた。こっちの気も知らずに、のんきな笑顔えがおで。

「あら、おかえりなさい。きょうは早かったのねえ」

「おばあちゃん、なんでわたしのことを・・・」

あいさつもかえさずに食ってかかりそうになってから、わたしはくちびるを強くかんで言葉をせき止めた。ここでこらえなければ、取り返しのつかないことになってしまいそうな予感があった。きよとんとしている祖母の顔をにらみつけて、わたしは無言で家にあがった。

自分の部屋に引っこむと、カバンを⑦ランボウに⑧ホウリだして、たたみに倒れたたお。たたみのおいがいつもより鼻について、口で浅く息をしていた。

ろうかです最後に見た、梢の顔。あのときたぶん、梢はわたしに謝らうとしていた。だけどべつに、謝らなくてもいい。絶対に謝らせたりしない。⑨「これでもう、友だちごつこを続けなくてすむんだから。」

「・・・せいせいしたわ、ほんと」

わたしは声に出してつぶやいてみた。なのに頭にかんでくるのは、なぜか梢たちといっしょにいたときのことばかりだった。教室でのおしゃべり、公民館の図書室のたなに積まれたおすすめの本、にぎやかにはしゃぎながら短冊をつるすみんなの姿。

ちがう、そうじゃない。教室で孤立しないためにつきあっていただけで、わたしは本気であの子たちと仲よくなりたかったわけじゃない。無理に仲よくならなくなつて、わたしのほんとうの友だちは、清凜にちゃんという。

寝転がったままカバンをさぐつて、携帯を取り出した。電源を入れて、画面をじつと見つめる。けれどきょうもまた、メールは届いていなかった。

いや、たしか清凜の中等科の期末テストは、七月になってからだだった気がする。だとしたら、いまごろみんなテスト勉強でいそがしくて、メールをしている暇もないのだろう。そう、きっとそうにちがいない。

⑩「わたしは自分に言い聞かせた。みつともないくらい必死に。」

次の日から、わたしはひとりになった。教室でも部活でも、だれともつきあわなくなつた。ときどき梢が話しかけようとしてくるのがわかつたけど、わたしはかたくなに気づかないふりをした。

朋華も高梨さんも沢村さんも、わたしに関わってはこなかった。関わりあいを拒絶する空気を、わたしが発していたせいかもしれないけれど、もともと彼女たちは梢の友だちだ。梢と仲たがいをしたわたしと仲よくなる理由はない。

せいせいした。そんなふうに強気でいられたのは、最初のうちだけだった。

清凜女子学院に通っていたころは、友だちがたくさんいた。こつちに来てからも、梢がすぐに仲間の輪に入れてくれた。自ら望んでひとりになってはじめて、わたしはひとりであることのさびしさを知った。

ひとりぼっちのまま数日が過ぎて、七夕の日になった。公立の中学でも、七夕の給食には七夕ゼリーが出るものらしい。それは紙製のカップに入った白いゼリーで、トッピングに星型の小さなゼリーが二個、申し訳程度にのっていた。

「・・・安っぽい」

わたしはだれにも聞こえない声でつぶやいた。それから、去年までの七夕ゼリーは、と思いだそうとして、もういいかげん嫌になつた。

どんなに強く願つたところで、どうせわたしは、清凜にはもどれない。だからこうやっていちいちあのころといまをくらべるのは、ただ無意味につらくなるだけだ。

わたしはため息をついて、食パンにぬるイチゴジャムの小袋こぶくろを開けようとした。するとそのとき、梢が「ねえ」とわたしに声をかけた。

話をする気はなかったのに、^⑩ハンシヤ的にそちらを向いてしまうと、梢はえんりよがちに言った。わたしの七夕ゼリーを指差して。

「それ、くれない？」

わたしはあぜんとして梢の顔を見つめた。梢は上目づかいうわめにわたしの返事を待っていた。

おどろきとあきれがいらだちに変わり、けれど嫌だと返事するのもしやくで、わたしはゼリーのカップをランボウに梢の給食のトレイに置いた。ありがと、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した。

まったく、あきれてものも言えないとはこのことだ。いくら食い意地が張っているといったって、よりにもよってわたしの給食をほしがるなんて。

胸の中でけいべつの言葉をならべながら、イチゴジャムの袋をちぎると、いきおいよく飛びだしたジャムがトレイをよこして、頭がカツと熱くなつた。けれどいかりはすぐに冷えてしぼまり、同時にわたしの心も暗く落ちこんだ。

・・・どうして、あんなつつけんどんにわたしたりしてしまつたんだろう。気づけばわたしはそう後悔こうかいしていた。しょうがない

なあ、と苦笑いでもうかべて手渡てわたしていれば、それをきっかけに梢と仲なおりできたかもしれないのに、と。

強がってごまかすことはもうできなかった。^⑫梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった。

たしかに梢はわたしがかくしていたことをばらした。だけど、もともと悪いのはわたしだ。最初の理由がなんだって、梢はずっとわたしにやさしくしてくれた。わたしをひとりにしないでくれた。なのにわたしはつまらない意地を張って、みえを張って、梢のことを傷つけて……。

そんなことはもうとつくにわかっていたのに、それでもまだ梢のことをさげ続けている自分に、心底嫌気が差した。給食に手もつげず、机の下でぎゅつと両手をにぎりしめていると、そうぞうしいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた。

^⑬自分が泣きそうになっているのがわかった。けれど涙があふれる寸前で、「美貴」とわたしの名前を呼ぶ梢の声が耳に届いた。梢のほうを向いたときには、無意識にまた不機嫌ふきげんな表情になってしまっていて、わたしは心の中で自分をなじった。だけどわたしの不機嫌顔は、^⑭梢の持った皿を見た瞬間しゆんかん、おどろきでぬりつぶされていた。

その皿のまんなかには、カップからはいねいに取り出された七夕ゼリーののっていた。しかも、ゼリーのまわりは、たくさんの星型のトッピングでかざられ、皿にはイチゴジャムでおしゃれな模様がえがいてあった。

『七夕ゼリー』如月かずさ

問一 — 部①・③・⑦・⑧・⑪のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部②「ふてぶてしき」・⑤「たかをくくっていた」の意味として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

② 「ふてぶてしき」
ア 相手を自分より下に見てばかりしている様子

イ イライラして投げやりになっている様子

ウ 相手を力でおさえつけこわがらせている様子

エ にくらしくなるほどずうずうしい様子

オ どうしていいかわからなくて困っている様子

⑤ 「たかをくくっていた」
ア 安心していた イ 軽く見ていた ウ 見過ごしていた

エ 見定めていた オ 無視していた

問三 — 部④「わたしの事情」とはどのような事情ですか。解答らんに合うように、ここより前の文中から二十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 — 部⑥に当てはまる最も適当な言葉を次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 梢をにらみ返していた イ 梢につめ寄っていた ウ 梢に向かってほえんでいた

エ 梢の手をにぎっていた オ 梢に背を向けていた

問五 — 部⑨「これでもう、友だちごっこを続けたいですむんだから」とありますが、「わたし」が「梢」との関係を「友だちごっこ」と言ったのは、この時どのように考えていたからですか。それを説明した次の文の□部に当てはまる言葉を、それぞれ文中から二十字程度でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

わたしは、梢が □ A と考える一方で、自分は □ B だと考えていたから。

問六 — 部⑩ 「わたしは自分に言い聞かせた。みっともないくらい必死に」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「わたし」はどういうことを「自分に言い聞かせた」のですか。六十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

(2) 「わたし」はどういうことを信じたかと思って「みっともないくらい必死に」自分に言い聞かせたのですか。解答らんに合うように、文中から二十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 — 部⑫ 「梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった」とありますが、梢や朋華たちとまた仲よくつきあいたいと思う「わたし」の心の内が表れている連続する二文をこの文章の前半から探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 — 部⑬ 「自分が泣きそうになっているのがわかった」とありますが、このようになるまでの「わたし」の気持ちや様子として本文の内容に**合わないもの**を次のア～キのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 梢たちに自分のみじめな気持ちにふれられたくないので、これからも梢たちをさげ続けなければならないのがつらいと思
っている。

イ 周りから同情されているのかと思うとくやしくて梢たちとの関わりを絶っているが、梢たちのやさしさや思いやりは感じ
取っている。

ウ 梢たちと無理に仲よくならなくても元の学校にはたくさんの方たちがいると信じていたが、今はわからなくなりその自信
はゆらいでいる。

エ 梢たちを悲しませるつもりはなかったが、清凜に帰りたいたいという言葉が仲よくしてくれていた梢を傷つけたと知り、後悔
している。

オ 梢たちと仲なおりがしたいと思いつつながら梢を目の前にとすなおになれず、強気な態度を取ったり、不快な表情をして
しまったりする。

カ 自分のつらい気持ちを理解せず関わってくる梢にいらだちを感じながらも、仲なおりしないとここではやっていけないと思っている。

キ 清凜と今の学校を比べて落ちこんでいても無意味で良い方向に向かないのに、いつまでも元の学校にこだわっている自分に嫌気が差している。

問九 ——部⑭「梢の持った皿を見た瞬間、おどろきでぬりつぶされていた」とありますが、梢はどのようなことを考えてこの七夕ゼリーを作ったと考えられますか。七十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)